氏　　名　　與久田(岡本)直子（よくた おかもと なお こ）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　教　博　第 40 号
学位授与の日付　平成 17 年 1 月 24 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目　「ドラマ」がもつ心理臨床学的意味に関する研究

論文調査委員　（主査）教授 藤原勝紀　教授 山中康裕　教授 岡田康伸

論文内容の要旨

本論文は，心理臨床実践の場で観察される，心が劇的に変化する現象を「ドラマ」と捉えて，心理臨床学的観点から考究したものである。研究法は，著者の臨床実践事例体験を背景に，ドラマ心性の一般的な性質に関する調査的・統計的研究を行い，そこから同一人に連続して実施するプロセス調査研究を開拓し，心理臨床学に固有の方法である事例研究モデルでの研究へと展開させる。新しい心理臨床研究法の可能性の提案を含む論文である。

第一部は，臨床事例の例示と文献展望に基づいて，研究目的と意義について論じている。

(1)第一章は，内的世界が劇的に表現された心理臨床事例の現象について文献及び自験例を提示し，ドラマチックな表現は，一見して突然に生じたかにみえるが，それ以前のプロセスの根底に準備されている可能性があり，変哲もない表現の中にも劇的な現象が存在し得る可能性があることを述べ，ドラマと捉える意義と文献的な考察を行っている。

(2)第二章は，心理臨床の場が，ドラマを生み出しやすい条件であること，一瞬一瞬の積み重ねとしての「即興性」の場であること，その背景にはセラピストとクライエントの「関係性」が重要であるとの可能性を述べている。

(3)第三章は，心理臨床の観点から本研究の方法について述べている。そして，基礎・調査的研究（統計的法則定立的視点）と事例的研究（個性記述的視点）の両側から「ドラマ」を捉える研究手法を述べ，研究の中心手続きとして用いたShneidman (1947) が開発したミニチュア舞台と人形を用いて即興劇を行う『MAPS（Make A Picture Story）人格投影法』の紹介を行い，研究手法として採用した意義を述べている。

第二部は，MAPS を用いた調査による一連の数量的・基礎的研究の実証的成果をまとめている。（各章は，『研究科紀要』と主に著者の所属学会機関誌等に掲載された論文に基づいている。第一章・第三章『心理臨床学研究』，第二章『日本芸術療法学会誌』）

(1)第一章は，調査対象者を「表現者」として，ドラマの特徴と気分との関連性を検討している。ドラマの特徴は，表現の豊かさや活発さに関する「表現性」，表現する自己自身への「観察性」の二因子を明らかにした。また，表現性の高さが気分の高まりに関係していること，表現性が高いドラマを観察性が低いままで表現する表現者には安心感が低下する傾向があることを見出だした。心理臨床的には，ドラマ表現にただ埋没するのでなく，表現する自己を観察する視点をもつことが大切であるとの可能性を考察している。

(2)第二章は，ドラマへの没入の度合いや即興的表現の度合いなどの「ドラマ体験」と気分との関連性について実証的な検討をしている。その結果，ドラマ表現を行う前の気分状態がドラマ体験に関係していることを見出だすとともに，ドラマ体験を進める上で，表現者と「見守り手」（調査者）の関係性が重要であるとの可能性を考察している。

(3)第三章は，ドラマの人形（キャラクター）に投影される「キャラクターイメージ」，「表現者の自己イメージ」，「ドラマ体験」の関連性について検討している。この研究から，ドラマ表現の際の表現者は，自己に抱いているイメージ以上に活動的なイメージをキャラクターに投影すること，ドラマ表現によって自己に備わっている力強さや活発さをキャラクターに投

影するようになっていくことを示唆する結果を得ている。

第三部は，より心理臨床の実際に近い枠組みからの調査研究である。毎週一回，同一曜日の同時間に10回のドラマ表現調査を行うプロセス研究モデルによって，数量的には測り得ないドラマのメカニズムや表現する意味に関する研究へと展開している。本研究は，個性記述的・事例研究的手法によっており，ドラマ・ドラマ中の表現者の様子・ドラマ後の振り返り内容の記述を基礎に，事例研究モデルで代表的な三事例を考察している。

(1)第一章の表現者は22歳の男性である。初期の見守り手を意識したコメディ調のドラマから，しだいに嫌いなタイプの人物を表現するに従い，キャラクターに肯定的・否定的イメージを投影し，いつか両者を自己の内に統合していった様子が記述されている。無難な生き方をしていた表現者が，日常の枠を離れた予想外のドラマ表現をとおして，本来の柔軟でプレイフルな自己表現へと展開したと述べる。また，表現者にとって見守り手は，ドラマの進行を通じて「真の見守り手」として位置づけられていくと考察している。

(2)第二章は，27歳の女性表現者である。淡々とナレーション風にドラマから離れた表現をしていた表現者が，普段の考えや出来事をドラマ表現するようになり，ドラマからの連想や夢を見るなどの日常と非日常を自由に行き来するような展開をみせ，最終期にはより内面的な深いドラマ表現になる。そこでのプロセスに寄り添う見守り手との関係性の深まりが，表現者の過去の受け入れと現在自己の再確認を進展させたと考察している。

(3)第三章は，20歳の男性表現者である。自分のペースや感覚に率直にドラマ表現を進める人で，初期から非日常性が色濃く表現された。その豊かな内的表現の中で，別れた恋人や死別した友人を登場させ，過去を再体験しつつ心の綻びを繕う内的作業を行い，最終回では自己をドラマの主役として登場させ，生きること・人生の意味への深い思いに至る。見守り手が，表現者の主体が漂流してしまわぬよう，宙に浮かないために立ち合うことで，ドラマ体験が表現者と見守り手の両者の内に蓄積されていく感触を記している。

第四部は，主に第二・三部の研究成果を総括し，ドラマの心理臨床おける意味について次のように要約し，その可能性と仮説生成的な考察をしている。

(1)内的世界を表現する際に重要な点は，ドラマ表現に埋没するのでなく，表現に漂いながらも自己を定位させる視点が大切であること。(2)個々のクライエントは，ドラマの積み重ねによる準備を通して，既知の自己・未知だった自己等に目を向け，過去や現在の自己を見つめる可能性が生まれてくること。(3)ドラマという体験手法による「私」と「私以外」の役割表現を通じて自己を表現し体験しながら，自己への気づきと癒しを得ていくこと。

(4)ドラマ・主体・セラピストとの関係性は，相互循環的に形成され深まっていくもので，その関係性のプロセスをつうじてクライエントの日常生活ともつながっていくこと。(5)ドラマのみならず，ドラマを振り返る体験も治療的機能をもっており，振り返る作業を進める際の見守り手の対応の仕方が重要であること。(6)ドラマの背後には，ダイナミックな人間の内面的心性，つまり「ドラマ性」の存在が推測でき，ドラマとドラマ性は絶えず相互に刺激し合いながら展開すること，と整理し考察している。

最終の第五部は，本研究の方法論的な可能性と今後の課題について述べている。本研究の方法は，調査研究法ではある。しかし，既存の静態的調査研究から動態的調査研究へと展開させえた本研究は，あくまで動態的な心理臨床事例研究を，調査研究モデルから開拓していくための方法論的な可能性をもっているのではないかと考察している。最後に著者は，心理臨床研究における新しい方法論の展開をめざす上で，心理臨床体験を踏まえた事例研究を深めながら考究していくことが，今後の必須基盤であると謙虚に結んでいる。

論文審査の結果の要旨

人生は，しばしばドラマに喩えられる。心理臨床の場は，その縮図とも考えられる。本研究論文は，心理臨床の場で観察される飛躍的に変化する劇的な心の現象に注目し，その現象を「ドラマ」と捉えて，心理臨床学的に考究したものである。

本論文が評価される点は，第一に，ドラマ現象に着目した一連の実証調査的な研究成果にある。第二は，ドラマに関する一般的な心性をみる数量的研究にとどまらず，同一人に連続して実施するプロセス調査的研究を行い，心理臨床に固有の事例研究モデルによる個性記述的な事例的研究へと新規に展開させた研究方法的な成果にある。

本研究は全五部から構成されている。第一部は，臨床事例の例示と文献展望によって本研究の目的と意義を述べている。第１章で，心理臨床の場で観察される劇的な現象は，一見すると突如・飛躍的に生じたかにみえるが，それ以前のプロセスの内に準備されている可能性があり，何の変哲もない通常の心理現象の中にも内在しうる可能性を述べている。

第２章は，心理臨床の場が一瞬一瞬の「即興性」によるドラマを生み出しやすい条件であり，セラピストとクライエントの関係性が基礎条件であることを論じている。第３章は，研究の方法・手続きに関する意義を述べ，ここで用いたミニチュア舞台と人形を用いて即興劇を行う『MAPS 人格投影法』の紹介と採用した意義を述べている。

第二部は，MAPS を用いた一連の数量的な基礎調査研究である。各章は，全て学会機関誌に掲載された論文に基づく堅実な研究成果である。第１章は，調査対象者を「表現者」，調査者を「見守り手」としてドラマの特徴と気分との関係を検討し，『表現性』と『観察性』の二因子を抽出した。そして，表現性の高さが気分の高まりに関係しており，表現性が高いドラマを観察性が低いままに表現する表現者には安心感が低下する傾向を見出だした。心理臨床でのドラマ表現の際には，表現する自己を観察する視点が大切になると考察している。第２章は，ドラマへの没入の度合いなどを「ドラマ体験」とし，気分との関係を検討している。その結果，ドラマ体験はドラマ表現を行う前の気分状態と関連が深いこと，ドラマ体験を進める際には，表現者と見守り手の関係性が重要であると考察している。第３章は，人形に投影されるキャラクターイメージと自己イメージ・ドラマ体験の関係について検討し，表現者が思う以上の活発なイメージをキャラクターに投影し，ドラマ表現を通じて自己表現が促進されるとの結果をえている。

第三部は，毎週同一の場と時間に10回連続して新規に調査し，心理臨床の実際に近い枠組みからの事例的研究によって，数量的には測りえないドラマのメカニズムや意味に関する研究へと展開させ，個性記述的研究手法を導入している。本研究は，平成15年度日本学術振興会特別研究員奨励費の助成を受けたものである。第１章は，コメディー調のドラマ表現から，嫌なタイプの人物像を投影するプロセスを経て，しだいに肯定的・否定的イメージの両面を投影しながら自己を統合していく事例を記述し考察している。第２章はドラマから距離をおいた表現の段階から，日常性を表現する段階を経て，日常と非日常を行き来するようなドラマ表現の展開に至り，深い内的体験を通じて過去と現在の自己を確認していった事例を記述し考察している。第３章は，最初から豊かな内的表現を進め，過去を再体験しながら心の綻びを繕う内的作業を行うことを通じて，最後は自己をドラマの主役として登場させ，人生の深い意味に触れるに至った事例を記述し考察している。この事例では，とりわけ見守り手との関係性の有り様に重要な意味があったと推測される。以上三事例的研究のドラマ体験には，相応の自己治療的な意味合いが推測できるもので，見守り手である著者の臨床実践経験を基盤にした対応なくしては成し得なかったと考える。

第四部は，第一～三部を総括し，ドラマの心理臨床における意味と仮説生成的な考察を行っている。ドラマの現象面を照準にした現段階までの研究から，表現としてのドラマの背後に，人間の内面的心性としての『ドラマ性』が普遍的に存在することを推測し，ドラマとドラマ性が絶えず相互関連的にドラマ表現を展開させていくとの考察に至っている。

第五部は，本研究の方法論的な可能性と今後の課題をまとめている。本研究の方法は調査研究法ではあるが，その枠組みから実際の臨床事例研究へと展開させていくための研究法としての可能性を展望し，今後の基本課題が臨床実践事例体験にあると結んでいる。

以上，本研究は，大学院に入学して初めて実際事例に触れた著者が，臨床実践の教育訓練過程では，一般対象者による統計調査的な静態的研究から出発せざるをえない状況での研究を積み重ねた上で，それを超えて動態的な臨床実践事例的研究へと工夫して方向をえていった着実な研究成果といえる。その意味で，心理臨床領域における課程博士に相応しい固有の研究プロセスから導かれた新鮮な提案を含む研究論文として高く評価できる。

ただし，ドラマという概念導入の必然性，物語等の類似概念や箱庭などの近接した方法との比較検討，心理臨床実践からの臨場感ある考察の厚みなど，現状での臨床実践経験上の力量不足からくる問題点や理論的考察の深さに関する指摘があった。また，全体としての論文構成を見た場合，事例表記や手続きの記載などへの改善点も指摘された。臨床的には特に，ドラマのネガティブな側面と意味に関する臨床的考察や，臨床事例に MAPS を実際にどう適用するかなど，今後の慎重な臨床実践研究に委ねざるをえない課題もある。

このような問題点はあるが，それらは現段階に至る実証的研究過程を通じてこそ明確化された今後の研究視点と課題の焦

点といえ，本研究の価値を害なうものではなく，むしろ本研究の堅実でユニークな成果からの課題発見の結果と評価してよいと考える。そして本論文は，心理臨床領域で多くの若手研究者が直面する，臨床事例研究を専門性として求めながらも，直ちには臨床事例研究を行い難いという独特の困難を，自らの臨床経験の現実において可能な研究法による課題発見と仮説生成から，固有の臨床事例研究に向う視点を定位するための新しい研究方法の提案を含むもので，困難な本研究領域における課程博士論文作成へのひとつの道筋を示唆するものとして価値あると評価された。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成16年12月６日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。